

『研究通信 創刊号—第五〇号』の刊行に際して

村研がいつの間にか二〇才になった。うれしく思っている。

第一回の大会は昭和二八年（一九五三）に仙台の東北大学で開かれた。その時二〇年も続くとは思っていなかったが、いつまでも続けさせたいと私はひそかに願っていた。しかしこのことは私独りだけの願いではなく、この大会に集った人々のすべての人の願いであるということがちぎにわかった。というのはこの第一回の大会が実にすばらしかったからだ。

当時東北大学にいた木下彰や中村吉治などの仲間が大会開催について心こもった配慮をしてくれたし、村研を突りあるものにしたという会員の熱情が一つに燃えあがったからだ。経済学、史学、民俗学、法学、社会学などいろいろな専門の研究者がムラを中心とする研究を出し合い、話し合い、談論し、歓談し、宿舎を共にして深夜に及ぶという大会運営の方式は期せずして自然にできあがっていった。

最初に意識して話合った大会の運営方式はむずかしい規約でしるべることにはしないでおこうということであった。われわれは誰れも村人の素朴さを愛した。現実のムラには多くの不自由はあるが、村研は自由で、肩書を考えまいとお互いに期せずして思った。われわれは丸はだかな人間として、心と心とを触れ合わせることをただ願った。その願い通りに大会は運ばれた。別れる時にお互にそれまでの、どんな学会よりもよかった、面白かったと言いつつ合った。

その時の感激がその後も続いて、次の大会を盛りあげた。その後大会の開催地は西に東へと交互に移ったが、集った人は毎年親しさを増し、新しい会員もふえていった。そして各自の研究を毎年深めてゆく様子がありありとわかった。

第一回の大会の頃には、日本はこれからどんな風になるのかまだ予想もつかなかった。ムラはもう大きく変わり始めてはいたが、今日ほどの状況になるとは誰れも想像もしなかった。この二〇年間の変化をみると驚かないわけにはゆかない。

しかし、この変化の激しい面に気を取られて、変わりにくいもののあるのに人はあまり気がつかないように思われる。それはもちろんムラばかりのことではなく、都会にもある。だから一国民全体の問題でもある。ともかく変わりにくいものをしっかり掴まない限り、変化そのものを深くみることはできないような気がする。

村研はその業績を立派に積み重ねつつ、二〇年を辿ったけれど、研究しなければならぬことはまだ山ほどある。初心を忘れないで、心のふれ合いの上に共同に研究しなければならぬ。

一九七二年八月三〇日